

## 自ら学び、自己を変化・成長させていく生徒の育成

－ 仲間とともに高め合う活動を通して －

鈴木 智喜 大森 純子 宮澤 玲子

### 1 研究テーマ設定の趣旨

本校では昨年度から、仲間とともに高め合う活動を通して、自ら学び、自己を変化・成長させていく生徒の育成を目指して授業の工夫・改善を試みてきた。その結果、生徒の確かな学びのためには、①学習における価値内容を含んだ肯定的な言葉をフィードバックすること、②多様な視点から指導法を工夫すること、③生徒の学習中や学習後の振り返りから、表現された言葉を見取っていくことが特に重要であることを改めて確認した。

このような成果をふまえ、今年度は、生徒が身に付けた知識・技能を活用して感じたり考えたりしたことを伝え合いながら、高まっていく自己を確認できるようにしたいと考えた。生徒にとって、学校は多様な他者とともに学びを深めていく場である。毎日の生活の中で友だちと共感したり、ぶつかりあったり、一緒に悩んだりしながら過ごしている。その中で生徒は体験したことや感動したことを友だちに伝えたい。友だちに伝えることで言いたいことが整理されたり、友だちからの反応によって新たな気づきが生まれたりして互いの学びが深まっていく。友だちから学んだことを基に他へ働きかけたり、関係性が弱い集団の中でも積極的に行動したりする姿がもっと見られるようにしていきたい。このようなかわり合う姿を、授業を通して「学び合い」へと高めていくことが重要であると考えた。

そのような課題の実現のためには、意図して協同の場面をつくり、自己と周囲の調和を図りながら、自ら考え判断し行動できるようにすることが大切である。生徒の豊かな自己の確立や社会性を育むために、保健体育科では主体的に運動に取り組んだり、健康・安全の知識を身に付け理解を深めようとしたりする生徒を育成したいと考えている。そこで授業を通して変化・成長する自分を感じ、生徒自身が学びの充実を実感できるように指導していきたいと考え、本研究主題を設定した。

### 2 研究計画

#### 1 第1年次（平成23年度）

- (1) 「仲間とともに高め合う活動」について
- (2) 自己の変化・成長に気付かせるための授業改善の手だて（自己観察・他者観察）

### (3) 手だてに基づく授業実践

## 2 第2年次（平成24年度）

- (1) 本校の保健体育科が考える協同学習について
- (2) 協同学習を取り入れた授業の課題と改善
- (3) 協同に視点を当てた授業実践

## 3 第3年次（平成25年度）

- (1) 授業実践の検証
- (2) 研究成果と今後の課題

# 3 研究内容

## 1 本校の保健体育科が考える協同学習について

学習意欲を喚起し、主体的かつ前向きに物事を考え判断する力を高めるには何が必要だろうか。人が意欲的に行動できるのは、自分自身の存在を基本的に価値あるものとして評価し信頼しているからである。逆に、自分が他者や社会から必要とされていないと感じているとしたら、意欲を持って学習に取り組んだり、積極的に社会ルールを守ったりすることは難しい。そう考えると、基盤としてなくてはならないものは、自己肯定感（自己評価）や自尊心であろう。

これら心の基盤の脆弱化を補強する手だてとして、共通の目標のもと、個人の役割を意識させながら仲間と一緒に協力して学習に取り組む「協同学習」があげられる。協同学習のよいところは、うまく成立した場合、そこに他者が存在するので、①自分が属する集団の中でどれだけ大切な存在であるかを自分自身で認識できること（自己有用感）、②外界の事柄に対し、自分が何らかの働きかけをすることが可能であるという感覚をもてること（自己効力感）が考えられる。

では、協同学習が単なるグループ作業で終わらないためにはどのようなことに留意したらよいのか。成立させるポイントを考えてみた。一つ目は、互いに協力を必要とするような関係を設定することである。設定にあたっては、互いに便宜を図ったり、恩恵を被ったりする関係がつくられるようにすることが大切である。例えば球技において作戦や戦術を考える際、おおまかな目標を示す者やボールを扱う技術を教える者、相手チームの動きを予想する者、それらをまとめる者など、自分はチームのために何ができるのかを考え、自然にその役割がとれるようになることである。そうやってチームのメンバーが同じビジョンをもち、共通の目的のために一つになれるのである。しかし、ただの相互依存関係になってしまうと、個人の力は相殺されてしまうので注意が必要である。

二つ目は、課題の難易度や目標の設定を集団に適したものにしておき、議論しやすい場を設定することである。そうすることで、生徒たちは教え合ったり、ほめたり認め合ったりして交流を深めることができる。例えばグループで技能を相互評価する際に、自分が担当している観点について気付いたことをアドバイスしたり、励ましたりする機会をもてるようにすると、生徒たちは話し合いにより評価の低い観点の中から、次の目標を見付けることが

できる。

三つ目は、協同学習の中で対人技能をどのようにして身に付けさせるか工夫することである。作戦通りにいかずゲームで負けた時、非難や攻撃をせずに間違いを指摘したり、異なる意見に対して建設的に話したりするなど、グループで協力して課題解決するために必要なスキルはたくさんある。保健分野も同様に、視覚的な工夫をしたり内容を明確にしたりして、生徒に表現の仕方や話し方を意図的に身に付けさせることが必要である。協同学習によって、コミュニケーションも含めた社会的技能が身に付くよい機会としたい。

四つ目は、グループでの振り返りを充実させることである。グループとしてどのように協力し合ったのか、個人では自分が担った役割や仲間への積極的なアドバイス・励ましなどについて振り返らせたい。振り返ることで、グループに対して果たした自分の役割を認識したり、目標達成を喜び合ったりすることができ、仲間同士の良い関係を維持するよう意識させることができる。そして次の単元でも、仲間と協同で学習することへの期待感をもたせることができるようにしたい。

## 2 附属小学校との連続性

小学校では、自分で体育の学び方を見付けることができるような学習や、仲間との一体感が高まるような学習活動を展開している。学び方を身に付けるため、自分で課題を設定し、達成のための練習方法やポイントを考え（予想）、実際に試し（実験）、自分に合った方法を見付ける（結果・考察）という「実験型体育」で成果を上げている。児童が主体となって学習を進めていくので、探究学習スタイルに近く、中学校での活用型学習活動にリンクしている。また、課題達成の方向性を、ペアやグループで話し合っ決めながら学習していくので、中学校での「協同」を意識した学習の素地づくりにもつながっている。

友だちとかかわりながら運動に取り組むよさは、一人では気付かなかった運動の楽しさやおもしろさに出会ったり、みんなで達成できた喜びを分かち合ったりすることである。小学校での「グループ達成型体育」では、記録が明確な運動領域において一体感が生まれやすく、中学校でもそれは同様である。実際に陸上競技の単元では、宇都宮大学加藤研究室の協力を得て、連続写真を使い目指す動作を明確にして、グループで走り幅跳びの平均値を上げるという課題に取り組んだ。生徒はグループ内で連続写真の資料を活用しながら、一つ一つの運動ポイントを教え合っ理解したり、具体的な言葉でアドバイスし合ったりして、どのグループも平均値があがるという成果が得られた。みんなが「わかってできる」を体験すると、次の運動への意欲も高まる。

このように中学校では、小学校の実践を受けて、発達段階や単元のねらいをふまえ、達成型はもちろん競争型も適宜組み合わせた指導を考えていくことが重要である。

伝え合う活動については、小学校では、応援や賞賛、喜びの共有、ポイントや出来映えの伝達、情報提供、アドバイスなど短い言葉で自分の意志を伝えられる言葉かけに重点をおいている。中学校では、作戦や戦術などの詳細な知識をもとに互いの意思疎通を図り、共通の目的のために互惠関係を生むことに重点をおいている。こうして小学校から中学校へと進む中で、子どもたちは学び合いの質を高めていくのである。

### 3 協同学習を取り入れた授業の課題と改善

課題の一つめは、生徒がグループ活動で自分の考えや意見を述べたり、相手の意図をくみ取りながら聴こうとしている中で、伝え合い高め合う活動としてはやや不十分な点がみられたことがあげられた。学習指導要領において「言語活動の充実」が叫ばれているが、その形式のみを引き取ってしまい、表面的な「話し合い」に重点をおいた活動となってしまう授業が見られた。このことから、活発な意見交換のみならず、他者の考えも聞いた上で、自分の考えがどのように変化したのか、しなかったのか、またそれはなぜなのかなど、思考の深まりを感じられるような授業への改善が求められた。

二つめは、生徒のつぶやきや頭の中に渦巻く様々な感情や思考（発見や驚き、意味の構築など）をどのようにして引き出すか、内言をどのような形で表現させるかということについてより詳細に検討していくことがあげられた。私たちは、この点を改善することによって、言語活動の可能性をより広げられるものと考えている。保健分野は言うまでもなく身体活動を中心に行う体育分野においても、思考・判断し表現する言語活動が生徒の能力を高める上で重要な役割を担っていると実感することが多いためである。

以上のことから、改善1としてグループで課題に取り組む際は、ワールドカフェ方式<sup>\*1</sup>を取り入れ、一つのテーマでたくさんの友だちの様々な意見を聞いたり、自分の意見に対する反応を知ったりすることができるようにした。この方法の良さは、誰かが何気なく発言したことがきっかけとなって、新しいアイデアが生まれること、別々のテーブルで話しているのに全員で話しているかのような一体感が生まれることである。

改善2としては、以前から保健学習で取り入れているマインドマップ<sup>\*2</sup>の作成を、体育分野でも取り入れてみた。このことにより個々の生徒が、単元のめあてに対してどのように考え取り組もうとしているのかや、それぞれの技能の向上へ向けて具体的に何をしようとしているのかがわかるようになった。運動場面では見えてこないが、生徒一人一人が目標に向かい、自分なりに思考して判断したことがマップとして紙面に表現されている。

### 4 実践例

#### (1) 体育分野：フラッグフットボールの実践（2年生）

##### ア フラッグフットボールの学習について

フラッグフットボールは、初心者や球技の苦手な生徒にとって、球技の最もおもしろい「得点する喜び」を体験させることができ、戦術学習を進めるには効果的な教材である。その理由として、①ボール操作の技能がやさしい、②攻撃の度に「ハドル」と呼ばれる作戦会議が設けられるため、一人一人の役割行動やチームの戦術が明確になる、③ゲームが1プレーごとに行われるため、作戦の成否並びにその原因がわかりやすいなどがあげられる。

\*1 集団思考に関わる技法の一つ。カフェのようにリラックスした状態でのコミュニケーションを意図的に作り上げる活動。

\*2 人間の脳の「放射思考」と呼ばれる情報処理構造を応用した表現技法。生徒の頭の中で起こっていることを見えるようにした思考ツール。

この単元では、「作戦を立てて、実行し、結果を分析・評価して、改善する」というサイクルを生徒たちに意識させ、種目の醍醐味を十分味わわせようと考えた。今回は2年生男子による実践であり、男子全員がフラッグフットボールは初めての経験であった。本単元は14時間扱いとし、その内の2時間はフラッグフットボールの特性・ルールを理解することや、作戦を立てる時間に充てた。残りの12時間は実技の学習として行った。

まず、1時間目は教室で、簡単なルールの説明や実際の映像を視聴するなど、運動を理解するための学習を行った。さらに、効果的な戦術学習を進めるために6時間目も教室で、一人一人が考えた作戦をもち寄りチーム内で吟味検討を行った。図1はそれらの学習活動の場面を示したものである。



図1 作戦検討会

これらの活動では、チームのキャプテンやヘッドコーチが中心となり、現状の課題を出し合ったり、チームにあった作戦を立てたりするなど互いに活発な意見交換が行われ、仲間と一緒に協力して学習に取り組む姿が見られた。図2は実際にグループで検討し、作成した作戦の一例である。

実技の授業では、上記の学習内容を活用し、連携が作戦の成功には欠かせないことを気付かせるため、これまでの学習（ハンドボールやサッカーの動き）を想起させながら、

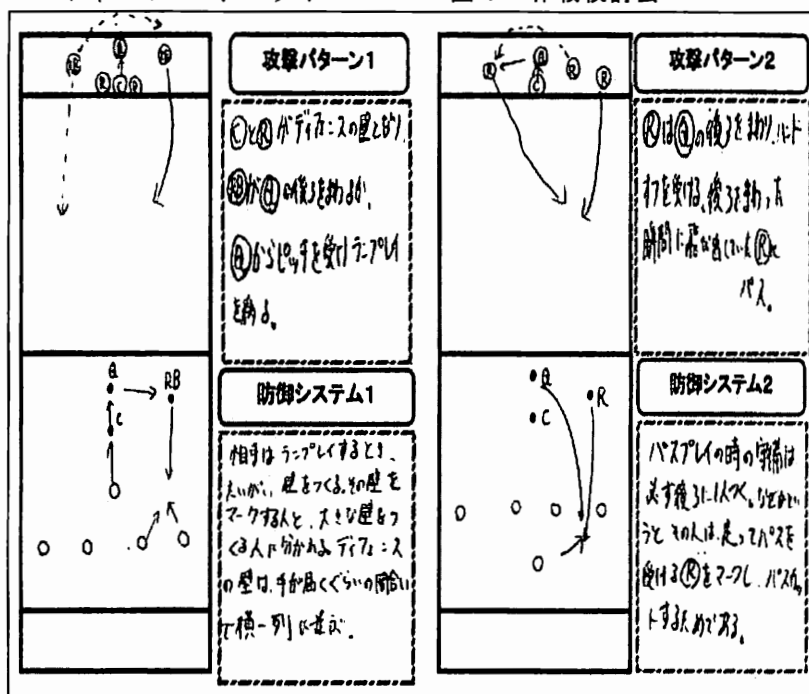


図2 チームで立てた作戦

練習やゲームを通して、仲間のプレーを生かした作戦の修正・改善を繰り返し、互いにフォローし合う場面をつくって取り組ませた。(図3・図4)

このようにフラッグフットボールの学習では、身に付けた基本的な技能や、考えた作戦をゲームで試すという具体的な実践を通して、客観的な作戦とゲームの分析能力が自己やチームに身に付いていく。これらの活動を通して、話し合いの重要性や献身的な役割の尊さを実感できたのではないかと考える。さらに毎時間の授業後には、一人一人にチームの作戦について、成功した、失敗した、どちらでもないという自己評価をさせ、その理由も記入させるなどして学習を振り返らせた。

このような仲間とともに高め合う活動の中から、効果的な練習方法や新たな課題を見出せることを期待した。



図3 作戦を確認し合っている場面



図4 作戦を実行している場面

### イ 生徒の振り返り

生徒は、チーム練習やゲームの場面で、作戦通りに動くことができたか、その作戦がチームに合っていたかなどを自己評価し、その理由も学習カードに記入した。その上で、新たな課題を明確にし、次時の授業に臨んだ。

図5は、生徒の自己評価の結果をグラフに示したものであり、このグラフから読み取れることは次の通りである。

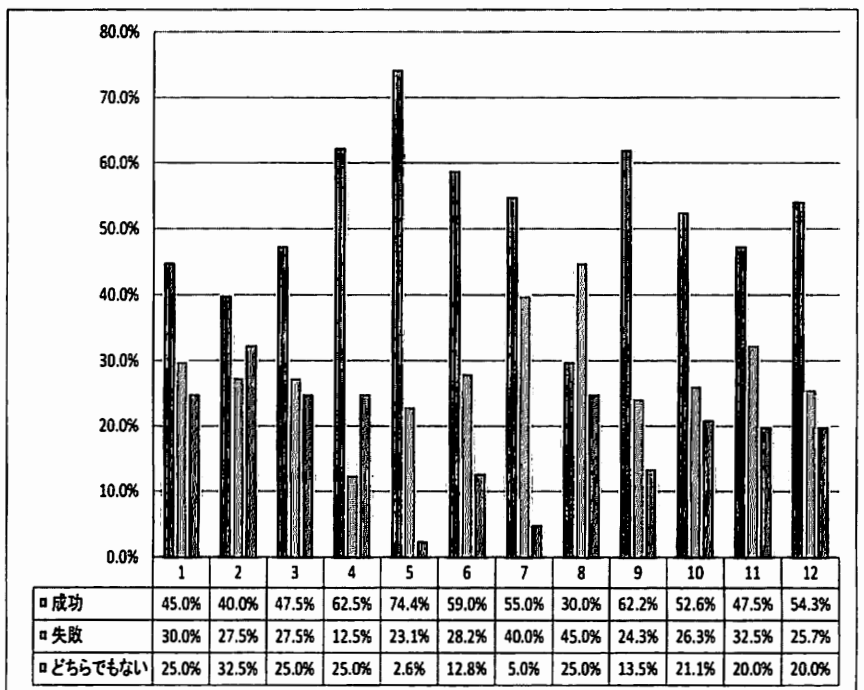


図5 生徒の自己評価

- ① 5時間目は、チームで立てた作戦が効果的に働き始めたので、成功の評価が最も高い。
- ② 6時間目から8時間目までは、チーム自体の作戦は充実してきたが、相手チームの防御も強化されてきたので、成功の評価が下がっている。
- ③ 9時間目は、強化された防御に対して、対応する作戦が思い通りにいったので、成功の評価が上がっている。

授業を進めていく過程で、途中の結果を教師が提示したり、活動の様子からよくできている点をほめたりして、生徒たちの学習意欲を喚起すると、それぞれのチームで新たな考えを積極的に出し合い、さらにチーム力を高めようとする動きが出始めた。生徒たちの活動の様子から、作戦の重要性に気付き、立てた作戦を練習で確認し、ゲームで実行、そして修正・改善の実践サイクルが数多く見られるようになった。これらの取組は、実はチームで考えた作戦が時にはトッププレイヤーの動きだったり、どのチームも予想

単元の終了時に実技 12 時間の結果 (図 5) を生徒に提示し、それを見て自分なりに今までの学習を振り返りながら、自己やチームの動きを分析し、なぜこのような結果になったのか気付いたことを自由に記述させた。図 6 は、実際に生徒が記述したものである。

5の時に上がったのは、1, 2, 3, 4で"他の班の戦術"を見たり、自分の班の戦術を考えたりにして数回、定戦をした後、やったので、作戦が成功する班がタカかったからだ"と思う。

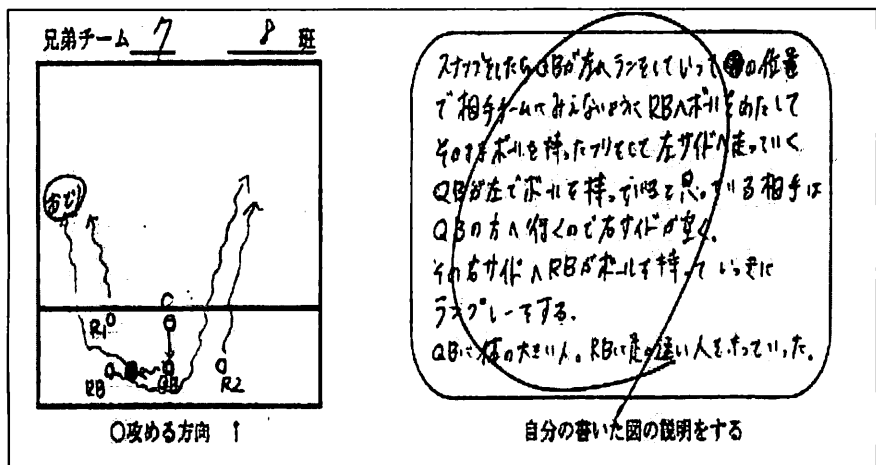
・ 6. 7. 8 にかけて下がったのは 自分達の中で、パスヤランが成力するだけでは物足りなくなったからだ"と思う。7で上がったのはフェイスアレーキターを上手く使い成力させることが出来るようになったからだと思います。

作戦を考えてとた後から急に成功、か、増えたか、その後は  
相手の作戦を破るようになってきて、「成功、か、減り」「失敗、か、  
 増えている。途中で作戦を増やしてからまた「成功、か、増えたか、  
 それに合わせ、みんな援軍が、あが、たり、相手の作戦が、同じに、な、たり  
 して、相手の作戦を防ぐ、さ、ま、な、た、た、め、「失敗、か、また、増、え、て、い、た、  
 の、は、な、い、か、と、思、う。

ウ 単元を終えて

このような学習は、課題を土台にしてスタートする。その過程では、話し合いをもとにした解決方法を大切にするのが重要である。チームが強くなるためには、客観的な分析能力と徹底した話し合いが必要で、チームワークの良さが大切である。得点者が主役で、その他のチームメイトは脇役ということではないことに気付かせることができる。考えた作戦は誰もが成功させたいという願いがある。その実現に向け、一人一人の役割を明確にするからこそ、作戦の成功につながるのである。その役割の中には、自分が犠牲になって（ブロックして）友だちが得点できたということがある。このような場面では、チームメイトのブロックがうまくいったから前進できたと評価し、協同意識を高めることにつながる。自分の行動が生きていて、仲間の行動も生きる。両者が同等となり、作戦を成功させるにはどちらの行動も不可欠であり、仲間に対して献身的な役割をすることの重要性にも気付くことができる。

単元のまとめとして、生徒一人一人に一番成功したチームの作



— 83 —

戦（図7）を記述させたり、授業を通して自己やチームがどのように変化し、成長したりしたのかをまとめさせた。（図8）

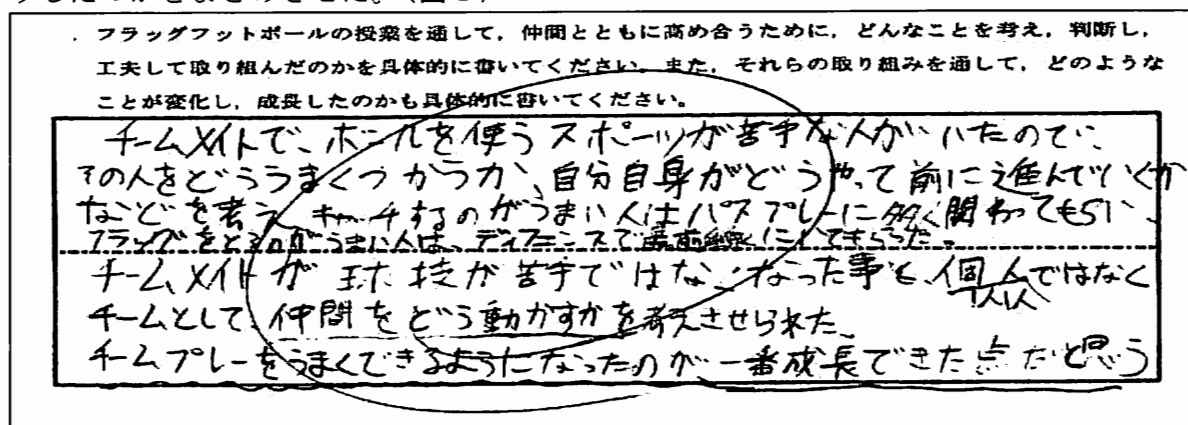


図8 生徒の振り返り

## (2) 保健分野 傷害の防止（エ：応急手当）の実践（2年生）

### ア 本時までの授業について

けがによる保健室利用者のほとんどは体育の授業や部活動の運動中に起こっており、擦過傷、打撲、捻挫、突き指の順に多い。水で洗う、冷やす等の簡単な手当ができる生徒がいる反面、指示待ちで行動できなかつたり、不適切な方法で手当をしようとしたりする生徒もみられる。そのような生徒の中には、日常生活でけがをする頻度が高く、よく目にするきずであっても、その場で正しい手当を行わないと、その後の治療が長引くなど予後に悪影響を及ぼすことに気付かない者もいる。そのため、きずには出血、疼痛、細菌感染の危険性があることなど、正しい知識が必要であると考え、保健学習カードを利用したり、要点を押さえた資料を提示したりするなど、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るために、養護教諭とともに単元の1時間目からチームティーチングによる授業を展開した。

### イ 本時の展開について

本時では、小学校で学習した「けがの手当」の知識や、中学校の本単元で学習した傷害の原因と防止、自然災害に備えて、応急手当の意義と手順、包帯法の実習で得た基本的な知識を基に、自作教材「応急手当物語」を用いてきずの手当を考えさせた。自作教材の内容は基礎的な知識の他に、野外体験学習中に捻挫や骨折をした場合（ケース1・2）や自宅で地震にあった際の打撲や出血を伴った場合（ケース3・4）など、4つのケースを取り上げた。それぞれ状況に応じた適切な判断ときずの手当を考えられるように工夫した。

前時までの学習や実習で身に付けた包帯法の技能を生かしたり、保健厚生委員会の生徒が作成して全クラスに配布した応急処置マニュアルを参考にしたりしながら、グループで最も適切であると思われる手当を考える学習活動を試み



図9 話し合いの場面



た。その際、なぜその方法を用いたのかなどの根拠や理由を明らかにさせるとともに、きずの手当の基本を確認させながら、グループ内で話し合い、発表できるように取り組ませた。(図9)

次に、グループで話し合った応急手当物語のケース1から4の中から、各グループでひとつのケースを担当させ、仲間と考えを出し合いながら自分たちが最適だと思う手当を発表し、他のグループから意見をもらった。その際、他のグループの発表や教師の補足説明を聞きながら新たな視点にも気付かせた。図10は、上記の学習活動で生徒が記入したケース3の資料である。

これらの学習活動を生かし、学習のまとめとして、あらかじめ用意された日常で使用している物を利用して仲間と相談しながら、実際に手当を行う活動へとつなげた。図11は、今までの学習や知識を活用し、応急手当の実習をしている場面である。

このように、応急手当の基本を実生活に生かせるよう実習することで知識の定着を図った。それぞれのケースはどれも生徒にとって身近なけがであるが、状況が屋外であったり地震であったりと、今までに学習した知識の活用が求められた。

仲間と試行錯誤しながら思考を深めていくことで、どんな状況でも臨機応変に対応できる思考力・判断力の育成につなげていきたいと考えた。仲間と協力しながら、一つの応急手当モデルをつくりあげていく学習活動(協同)は、多様な考えに触れると同時に、自分との類似や相違に気付いたり、仲間を受容されていると感じたりすることができる活動につながったと実感している。

ウ 本時の学習を終えて

生徒の振り返りから、今後の日常生活や学校行事などで、学習したことを生かし適切な応急手当を施していこうとする前向きなコメントが書かれていた。(図12)

【ケース3】

寒い冬のある日のこと、三郎さんは弟とリビングでこたつに入りながらのんびりしていました。すると突然、激しい揺れが起こり、たなに倒っていた重い置物が弟の方へ落ちてきました。弟があわてて自分の頭を腕で抱えたとき、鈍い音がして右腕(前腕)を痛めて倒れています。

考えられること・注意すること

「打撲・骨折の疑いがあるから、まずは怪我の場所を確認する。」

応急手当の手順

自分だったら  
①怪我の場所を確認  
②足を冷やしながら「大丈夫かな」と確認する  
③怪我の場所を確認し、怪我の場所を確認する(冷やしながら)

グループでは

打撲・骨折の疑いがあるから、安全な場所を確認  
①足を冷やしながら「大丈夫かな」と確認する  
②怪我の場所を確認し、怪我の場所を確認する(冷やしながら)

先生のアドバイス

怪我の場所を確認し、怪我の場所を確認する  
①足を冷やしながら「大丈夫かな」と確認する  
②怪我の場所を確認し、怪我の場所を確認する(冷やしながら)

実際にやってみて

怪我の場所を確認し、怪我の場所を確認する  
①足を冷やしながら「大丈夫かな」と確認する  
②怪我の場所を確認し、怪我の場所を確認する(冷やしながら)




図10 自作教材ケース3



図11 実習の場面

○ 今までの生活を振り返り、新たに気付いたことや、改めてほしいことなどを記入してください

患者が痛くない、気持ちのよい手当をしてあげることが重要だと思った。実際に身の周りにあるものでやってみると大変だと分かった。もし周りに人がいたらその人の体や手も借りたいと思った。もし、そういう場面に出会っても、パニックにならず、冷静に対応したい。

図12 生徒の振り返り

今後も保健分野の学習を通して、自他の健康に関心を持ち、自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力の育成に努めたい。

#### 4 成果と今後の課題

体育分野では、チームで協同して行う戦術学習を通して「作戦を立てて、実行し、結果を分析・評価して、改善する」というサイクルを意識させた。また、毎時間ごとの振り返りでは次の課題を明確にさせ、新たな考えや新しい動きを見出すことができたようにした。その結果、チームの団結力が強くなり、「ひとはみんなのために、みんなはひとりのために」という雰囲気ができ、集団が生きてその中で個が活かされるようになった。するとチームに対して協力的になり仲間の長所を見つけたり、困難に対して前向きで失敗しても立ち直りやすくなったりなど、自己肯定感の高まりを予感させるような変化が見られた。必然的に、教師の言葉かけも肯定的になり学習意欲が喚起され、さらによい循環が生まれた。

保健分野では、課題をより実践的なものにしたり、視覚的な工夫をしたりすることで、新たな気付きや発見をグループで共有することができた。振り返りでは、共有された知識が個人のものとなって定着していく様子を見取ることができた。

今後は、生徒が自分の考えや学んだことに自信をもち、積極的に周囲とかかわりながら学習に取り組めるようになることが大切である。また、小学校との連続性を念頭におき、小学校で身に付けた知識・技能を活用させて、中学校での思考力・判断力・表現力に磨きをかけていきたい。

#### 引用・参考文献

- ・文部科学省：『中学校学習指導要領 解説－保健体育編－』 東山書房 2008 年
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：『第 56 回公開研究発表会発表要項』 2011 年
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：『宇大附属中研究論集第 60 集』, 2012 年
- ・平田和孝：『みんながタッチダウンする フラッグフットボールの指導』 創文企画 2011 年
- ・『体育科教育』第 56 巻第 2 号 大修館書店, 2008 年
- ・『体育科教育』第 59 巻第 11 号 大修館書店, 2011 年
- ・『体育科教育』第 59 巻第 13 号 大修館書店, 2011 年
- ・神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中等教育学校：『生徒と創る協同学習－授業が変わる・学びが変わる－』 明治図書 2009 年
- ・ジョージ・ジェイコブス, マイケル・パワー, ロー・ワン・イン：『先生のためのアイディアブック－協同学習の基本原則とテクニク－』 ナカニシヤ出版 2005 年